

日本中國學會報 第七十五集
二〇二三年十月七日 發行 拔刷

歴史物語の形成

——劉向『列女傳』卷七 孽嬖傳「周幽褒姒」を中心に

仙石知子

歴史物語の形成

——劉向『列女傳』卷七孽嬖傳「周幽褒姒」を中心に

仙石知子

はじめに

中國史で理想とされる夏・殷・周の三代は、末喜・妲己・褒姒という三人の悪女により滅んだ、と劉向の『列女傳』は記す^①。しかし、司馬遷の『史記』には、夏本紀があるにも拘らず、末喜は登場しない。末喜は『列女傳』という歴史物語を集めた子書に記されるだけで、歴史事實を記すとされる『史記』という史書には、歴史事實でないがために記されないであろうか。『史記』と『列女傳』に記述が残る褒姒であつても、西周の現實をある程度反映する『詩經』^②での褒姒の姿は、『史記』や『列女傳』で知られる「笑わぬ女」ではない。歴史事實と歴史書の記述との相違、歴史事實と歴史物語との相違について、出土資料を含めた古典文献からそれを考えることは不可能なのであるうか。

本稿では、中國において悪女の典型とされる褒姒の傳説の形成過程を明らかにすることにより、中國史において悪女がいかなるものと觀念されていくのかを探り、そうした思想の根源と完成形態を示す。それを通じて、中國史における歴史書と歴史物語の狭間を明らかにする

歴史物語の形成

ことが本稿の目的である。

一、『詩經』と『春秋左氏傳』

褒姒の物語の展開を考えていくため、褒姒を記す最古の資料である『詩經』から検討していこう。『詩經』小雅正月には、つぎのように褒姒に關する記録がある^④。

心之憂矣、如或結之。

心の憂ふる、之を結ぶ或るが如し。

今茲之正、胡然厲矣。

今茲の正、胡ぞ然く厲しき。

燎之方揚、寧或滅之。

燎の方に揚がる、寧ぞ之を滅すこと或らんや。

赫赫宗周、褒姒威之。

赫赫たる宗周、褒姒之を威す。

小雅正月は、『詩經』に載せる西周の滅亡を詠んだ詩の一つである。簡単な現代語譯を示しておこう。

國家の危亡に瀕する國事を憂うる心の悩みは、物が結ばれて解けないようである。

今日の朝廷の政事は、どうして悪をなすことがこれほど甚だしいのか。

野火が燃えあがつており、これを消すことができない。かくかくたる宗周は、褒姒がこれを滅ぼそう。

毛傳は、褒姒について、「褒は、國なり。姒は、姓なり。威は、滅なり。褒國の女有り、幽王焉に惑ひて以て后と爲す。詩人其の必ず周を滅すを知るなり（褒、國也。姒、姓也。威、滅也。有褒國之女、幽王惑焉而以爲后。詩人知其必滅周也）」と説明する。ここでは褒姒は、褒國の子とされている。そして、褒姒がどのように西周の滅亡と關わりを持ったのかは記されていない。ただ、滅亡の原因として、その名を擧げられるだけである。

もう一つ掲げよう。『詩經』大雅 瞻卬には、褒姒の名は明記されないものの、そのあり方について、次のように記されている。

① 哲夫成城、哲婦傾城。

懿厥哲婦、爲梟爲鴟。

② 婦有長舌、維厲之階。

亂匪降自天、生自婦人。

匪教匪誨、時維婦寺。

これも簡単に現代語譯を付しておこう。

① 謀慮の多い男は一國を起し、謀慮の多い女は一國を傾ける。

ああその（幽王の）哲婦（である褒姒）は、フクロウやヨタカのようなである。

② 婦人のおしやべりは、（王を）悪に落としていく糸口である。

（西周の）亂れは天より降つたものではなく、婦人より生まれた。

（幽王に）教え誨えるものも無く、親近した婦人（が滅亡の原因）であった。

鄭箋によれば、哲夫は幽王で、哲婦は褒姒とされる。鄭箋は、傍線

部①について、「哲とは、謀慮多きを謂ふなり。城は、猶ほ國のごときなり。丈夫は、陽なり。陽は動く、故に謀慮多ければ則ち國を成す。婦人は、陰なり。陰は靜、故に謀慮多ければ乃ち國を亂す（哲、謂多謀慮也。城、猶國也。丈夫、陽也。陽動、故多謀慮則成國。婦人、陰也。陰靜、故多謀慮乃亂國）」と説明する。すなわち、男性であれば「國を成」す「哲」と表現される「謀慮」の多きは、女性の場合には、「陰は靜」であるため、「國を亂す」ことを招くという。

さらに、鄭箋は、傍線部②の「婦の長舌有るは」以降について、「長舌は、言語多きを喩ふるなり。是れ王大厲に降るの階なり。階は上より下る所なり。今王の此の亂政有るは、天よりして下るに非ず、但だ婦人より出づるのみ。又人の王に教へて亂を爲すもの有るに非ず。王を語りて惡と爲す者は、是れ惟だ婦人を近づけ愛し、其の言を用ふるの故なり（長舌、喩多言語。是王降大厲之階。階所由上下也。今王之有此亂政、非從天而下、但從婦人出耳。又非有人教王爲亂。語王爲惡者、是惟近愛婦人、用其言故也）」と説明する。すなわち、褒姒は多くの「謀慮」に基づき「長舌」する女性であり、褒姒を近づけ愛したことが、國を滅ぼす「階」であった。西周は、天により滅んだのではなく、褒姒という婦人により滅亡したと鄭玄は解釋するのである。

このように周の幽王が國を滅ぼすことを諫言する『詩經』大雅 瞻卬は、『詩經』小雅 正月と同様に褒姒を周の滅亡原因とするが、そこに描かれる褒姒は、「哲婦」で「長舌」な女性であった。「笑われない女」としての褒姒の姿は、『詩經』にはいまだ見られない。

『詩經』に記される西周を滅ぼした褒姒については、こののち現在に傳わらなかったものを含めて、多くの傳説が作られたと考えてよい。それは、今日に傳承される褒姒物語の基本を傳える『國語』には、複

數の褒姒の傳説が包含されると考えられるためである。

『國語』鄭語・晉語に収録される褒姒の物語について、四つに分けて検討していこう。

第一は、周の宣王のときの童謠と、王の子ではない王宮の子の出奔を伝える鄭語の物語である。

①宣王の時、童謠有りて曰く、「糜弧・箕服、實に周國を亡ぼさん」と。是に于て宣王之を聞くに、夫婦の是の器を鬻ぐ者有り。王執らへて之を戮せしめんとす。②府の小妾女を生むも王の子に非ざるなり。懼れて之を棄つ。此の人なるや、收めて以て褒に奔る。天此れを命ずること久し、其れ又何ぞ爲む可けんや。

幽王の父である①宣王のとき、「糜弧（山桑の弓）と「箕服」（箕の弓袋）が周を滅ぼすという「童謠」があり、宣王は、それを賣り歩いてきた夫婦を捕らえて殺そうとした、という。一方で、②王宮の「小妾」は、王の子ではない子を産んでこれを棄てた、という。①と②との繋がりが悪いため分かりにくいのが、「糜弧」と「箕服」を賣り歩いてきた夫婦は、宣王に殺されず、「小妾」の棄てた子を拾って褒國に逃れた。この子が褒姒である。なお、褒國は、『國語』晉語一の韋昭注に、「有褒は、姒姓の國なり（有褒、姒姓之國）」とあり、同韋昭注に、「姒姓は、禹の後裔なり（姒姓、禹後也）」とあることから、夏を建國した禹の後裔である。第四として扱う『國語』晉語一には、「周の幽王有褒を伐ち、有褒の人褒姒を以て焉に女す（周幽王伐有褒、有褒人以褒姒女焉）」と描かれ、褒姒は、禹の末裔であり、褒國を攻めてきた幽王に嫁がされた女性となる。そして、『國語』鄭語に描かれている褒姒は、次にあるように龍の糝から生まれた子とされる。

『國語』鄭語は、第一の部分に續けて、第二の部分として、龍の糝

から生まれた子こそ、王宮で棄てられた子、すなわち褒姒であること
を次のように述べていく。

訓語に之有りて曰く、「①夏の衰ふるや、褒人の神、化して二龍と爲り、以て王庭に同ひて言ひて曰く、「余褒の二君なり」と。夏后之を殺すと之を去ると之を止むるとを卜ふに、吉なること莫し。其の糝を請ひて之を藏むるを卜ふに、吉なり。乃ち幣を布く。而して策して之に告ぐ。龍亡げて糝在り。積して之を藏め、傳へて之を郊す」と。殷・周に及ぶまで、之を發すること莫きなり。厲王の末に及び、發して之を觀るに、糝庭に流れ、除く可からざるなり。王婦人をして幃せずして之を諫がしむるに、化して玄龜と爲りて、以て王府に入る。②府の童妾、未だ既に亂せざるにして之に遭ひ、既にして笄して孕み、宣王の時に當たりて生む。夫あらずして育つ、故に懼れて之を棄つ。弧服を爲る者、方に戮せられんとして路に在り。夫婦其の夜に號くを哀れみて、之を取りて以て逸げ、褒に逃る。

第二の部分では、第一で述べられた王宮の子（褒姒）の由来を説明する。①夏の褒人の神の化身である龍の糝が、周の厲王のときに暴かれ、王宮の②童妾が處女懐胎で生んだ子こそ褒姒であるという。谷口義介は、第二の部分は無い方が、第一と第三は繋がりやすく、卑しい素性の父なし子が國を滅ぼす物語としてまとまりがあるという。續けて第三の部分掲げよう。

第三は、褒に逃れた者の娘（褒姒）が、周の滅亡原因となる幽王が後嗣にした伯服を産む話であり、第二の訓話の續きとして描かれる。

褒人の褒姒^{うべい}有りて、以て王に入ることを爲し、王遂に之を置く。是の女を嬖し、后と爲すに至らしむ。而して伯服を生む。

天の此れを生ずること久しく、其の毒を爲すや大なり。將に淫徳を候ちて之を加らしめんとす。毒の曾腊なれば、其の殺すこと滋々速し^①。

谷口の指摘の通り、第二の龍の齜から生まれた話を抜いても、物語は接合する。もちろん、『國語』は、同じ訓話の中に、第二・第三の話を含め、第三にも褒姒が「天の此れを生ずる」ものであると第二の物語を承ける工夫はしている。ただ、その接合はあまり成功しているとは言えず、『國語』鄭語は、卑しい素性の父なし子が國を滅ぼす第一・第三の物語と、龍の齜から處女懐胎した娘を描く第二の物語の接合と考えられる。そして谷口は、第二の物語と接合する話として『國語』晉語の次の物語を擧げるが、別系統と考えられる。

第四は、『國語』晉語に載せる美女が國を滅ぼす物語である。

昔夏桀有施を伐ち、有施の人^①妹喜を以て焉に女す。妹喜寵有り、是に于て伊尹と比して夏を亡ぼす。殷辛有蘇を伐ち、有蘇氏^②妲己を以て焉に女す。妲己寵有り、是に于て膠鬲と比して殷を亡ぼす。^③周の幽王有褒を伐ち、褒人褒姒を以て焉を女の宜白を逐ひて伯服を立つ。太子申に出奔す。申人・鄆人西戎を召して以て周を伐つ。周是に于て亡ぶ。今晉德寡なくして俘女に安んじ、又其の寵を増す。三季の王に當つと雖も、亦た可ならずや。^④

第四は、夏・殷・周という三代の滅亡が、①妹喜・②妲己・③褒姒という亡國の娘によることを説く。ただし、褒姒以外の物語は、類型的で内容は無い。それでも、他の二國と關わらせるところに、鄭語に記された褒姒の物語との異質性が認められ、第四は、亡國が娘を嫁が

せて復讐する物語と考えることができる。

このように、『國語』には三種の物語が記されている。最も神祕的で物語性の強いものは、第二の龍の齜から處女懐胎して褒姒が生まれる物語で、第一・第三の卑しい素性の父なし子が國を滅ぼす物語も、第一の話であれば、「天の此れを命ずること久し（天之命此久矣）」、第三の話であれば、「天の此れを生ずること久しく（天之生此久矣）」とする部分に神祕的な要素が残る。これに對して、第四の亡國が娘を嫁がせて復讐する物語には、神祕性は認められない。このように、『國語』に記される褒姒の物語は、三種に分類が可能であり、統一的な姿は未だ結ばれていない。何より、後世に最も有名な「笑わぬ女」という褒姒の要素が含まれていない。この要素が褒姒の物語に加えられる背景として、直接的には褒姒と關わりのない『春秋左氏傳』との關わりを検討しなければならぬ。

「笑わぬ女」としての褒姒の原型は、『春秋左氏傳』昭公傳二十八年に、次のように記されている。

昔賈の大夫惡し。妻を娶りて美なり。三年言はず笑はず。御して以て臯に如き、雉を射て之を獲たり。其の妻始めて笑ひて言ふ。賈の大夫曰く、「才の以て已む可からず。我射る能はずんば、女遂に言はず笑はざるかな」と。^⑤

長文となるため省略したが、この物語の語り手は叔向である。叔向は、婚姻が不満で、三年間話さず、笑わなかつた妻が、雉を射る夫の才能を見て、話し笑うようになったという物語を語っている。そして、同じ『春秋左氏傳』昭公傳二十八年において、叔向が美人を娶ろうとすることを諫める母の言葉として、『國語』の第四の物語と軌を一にする、三代の滅亡は女性によるとの主張が次のように述べられる。

昔有仍氏女を生むに、黷黑にして甚だ美なり。光かがやき以て鑑とす可し、名づけて玄妻と曰ふ。樂正の後夔之を取り、伯封を生む。實に豕心有り、貪浬にして饜あくこと無く、忿類にして期無ければ、之を封豕と謂ふ。有窮の後羿之を滅ぼす、夔是を以て祀られず。且つ三代の亡び、共子の廢せらるるは、皆是の物なり。女なんぢ何を以て爲さんや。夫れ尤物以て人を移すに足る有り。苟いくも徳義に非ずんば、則ち必ず禍有らん。

ここでは、黒髪の美しい有仍氏を娶つたために、樂正の後夔が后羿に滅ぼされたことを事例として掲げた後に、三代の滅亡は美しい女性による、と叔向は諫められている。同じ『春秋左氏傳』昭公傳二十年において、共に叔向との關わりで描かれる三代の滅亡が美女による、という物語と笑わなかつた妻が夫の才能を見て、話し笑うようになった、という話が、『國語』に描かれる三代の滅亡の中で、唯一内容を持つていた褒姒の物語と結合することにより、褒姒の物語を完成させた蓋然性は高いと言えよう。

以上のように、『詩經』では、周の滅亡原因となつた「哲婦」で「長舌」な女性として描かれていた褒姒は、『國語』では、龍の祭から處女懐胎した、卑しい素性の父なし子が、亡國から嫁がされて復讐する、という三種の物語の結合體として描かれていた。そして、『春秋左氏傳』に記される褒姒とは無關係な「笑わぬ女」と美女が國を滅ぼすという要素は、『呂氏春秋』において、褒姒の笑いを求める幽王の姿として加えられていく。

二、『呂氏春秋』と『史記』

『詩經』において、褒姒は周の滅亡原因とされたが、その理由は褒

姒が(1)「哲婦」で「長舌」な女性であることに求められた。『國語』は、褒姒が周を滅ぼした理由として、(2)龍の祭から處女懐胎し、(3)卑しい素性の父なし子が、(4)亡國から嫁がされて復讐するという物語を傳えた。そして、『春秋左氏傳』に原型が見られた(5)「笑わぬ女」が國を滅ぼすという褒姒の物語は、『呂氏春秋』慎行論疑似に次のように描かれる。

⑤周は鄆・鎬に宅して戎人に近し。諸侯と約し、高葆禱を王路に爲り、鼓を其の上に置き、遠近相聞く。卽し戎の寇至らば、鼓を傳へて相告げ、諸侯の兵皆至りて天子を救ふ。戎の寇當て至るに、幽王鼓を撃ち、諸侯の兵皆至る。褒姒大いに説かび之を笑ふ。幽王褒姒の笑を欲し、因りて數々鼓を撃ち、諸侯の兵數々至るも而も寇無し。後に至りて戎の寇眞に至り、幽王鼓を撃つも、諸侯の兵至らず。④幽王の身、乃ち麗山の下に死し、天下の笑ひと爲る。此れ夫の①無寇を以て眞寇を失ふ者なり。賢者は小善もて以て大善を致す有り、不肖の者は小惡もて以て大惡を致す有り。②褒姒の敗は、乃ち幽王をして小説を好みて以て大滅を致さしむ。故に形骸相離れ、三公・九卿出で走る。此れ③褒姒の死せし所用にして、平王の東徙せし所以なり。秦襄・晉文の王に勞して地を賜はる所以なり。⑤

このように『呂氏春秋』は、(5)戎に備えるための太鼓で諸侯が集まるのを見て褒姒が笑つたことを見た幽王が、戎は來ていないのに頻繁に太鼓をうち、本當に戎が來た時に諸侯は集まらず滅亡したことを記す。慎行論疑似の主張は、①「無寇」を「眞寇」と疑似したこと、周の滅亡を招いたことにある。あくまで褒姒はその事例として掲げるだけであるため、褒姒が普段から「笑わぬ女」であることは明記

されない。『呂氏春秋』を承けた『史記』になると「笑わぬ女」であったことが明記される。しかし、『呂氏春秋』でも褒姒の笑いを得るために、幽王が太鼓をうっていることから、褒姒は普段笑わないため、そんな褒姒を笑わせようとしたと想定できる。『呂氏春秋』において、笑わぬ褒姒が、集まってきた諸侯を見て笑ったので、幽王は何度も偽の來襲で諸侯を呼び、そのために本當の來襲時に諸侯たちは來なかつた、という褒姒物語の骨格ができたと考えよう。

その一方で、『詩經』に記された褒姒が(1)「哲婦」で「長舌」な女性であること、『國語』にまとめられた(2)龍の磔から處女懐胎し、(3)卑しい素性の父なし子が、(4)亡國から嫁がされて復讐するという(1)の(4)の事柄が缺如していることには留意したい。

また、②褒姒による周の滅亡は、幽王が「小説」(小さな悦び)のために「疑似」を繰り返したことが原因とされており、滅亡原因としては、褒姒よりも幽王の責任が重く捉えられ、④「天下の笑ひ」ものとなったことも記される。そして、褒姒は③「死」んだことだけが記されている。なお、細かい点だが、狼煙臺で太鼓をうっていることも確認しておく。『史記』では、「燹火」を擧げるといふ記述である。

このように『呂氏春秋』により、褒姒の笑いを得ようとして、幽王が周を滅ぼした物語が形成された。褒姒は、『史記』までの周の滅亡原因を語る物語の中で、(1)「哲婦」で「長舌」な女性で、『詩經』起源、(2)龍の磔から處女懐胎し、『國語』起源、(3)卑しい素性の父なし子で、『國語』起源、(4)亡國から嫁がされて復讐した、『國語』起源、(5)「幽王が笑いを得ようとした女」(『呂氏春秋』起源)と描かれていた。それでは、「史書」である『史記』は、これらの話をどのように組み合わせながら、周の滅亡の「歴史」を記していくのであろうか。『史記』

卷四 周本紀には、次のようにある。

三年、幽王褒姒を嬖愛す。褒姒子の伯服を生み、幽王太子を廢せんと欲す。太子の母は申侯の女たりて后と爲る。後に幽王褒姒を得、之を愛し、申后を廢し、并びに太子の宜臼を去り、褒姒を以て后と爲し、伯服を以て太子と爲さんと欲す。⁽⁶⁾周の太史たる伯陽史の記を讀みて曰く、「周亡びん」と。⁽²⁾昔夏后氏の衰へるより、二神龍有りて夏帝の庭に止りて言ひて曰く、「余は褒の二君なり」と。夏帝之を殺すと之を去ると之を止むるとを卜ふに、吉なること莫し。其の磔を請ひて之を藏むるを卜ふに、乃ち吉なり。是に於て幣を布きて策して之に告ぐ。龍亡げて在り。憤して之を去る。夏亡ぶや、此の器股に傳はる。股亡ぶや、又此の器周に傳はる。三代の比ひ、敢て之を發すること莫し。厲王の末に至り、發して之を觀るに、磔庭に流れ、除く可からざるなり。厲王婦人をして裸にして之を諷がす。磔化して玄龜と爲り、以て王の後宮に入る。後宮の童妾、既に醜して之に遭ひ、既にして笄して孕み、夫無くして子を生み、懼れて之を棄つ。⁽³⁾宣王の時、童女謠して曰く、「檠弧・箕服、實に周國を亡ぼさん」と。是に於て宣王之を聞くに、夫婦に是の器を賣る者有り、宣王執らへて之を戮せしめんとす。逃る。道に於て郷者後宮の童妾の弃つる所の妖子路に出づる者を見、其の夜に啼くを聞き、哀みて之を收む。夫婦遂に亡れ、褒に縛る。褒人罪有り、童妾の弃つる所の女子なる者を王に入れ以て罪を贖ふを請ふ。弃てられし女子褒に出づれば、是を褒姒と爲す。幽王の三年に當たり、王後宮に之を、見て之を愛す。子の伯服を生み、竟に申后及太子を廢して、褒姒を以て后と爲し、伯服を太子と爲

す。太史の伯陽曰く、「禍成れり、奈何ともす可きこと無し」と。⁽⁵⁾ 褒姒笑ふを好まざれば、幽王其の笑ひを欲し萬方するも

故に笑はず。幽王煖燻・大鼓を爲り、寇至る有らば則ち煖火を擧ぐ。諸侯悉く至り、至るも寇無ければ、褒姒乃ち大いに笑ふ。幽王之を説び、爲に數々煖火を擧ぐ。其の後信ぜず。諸侯益々亦た至らず。幽王號石父を以て卿と爲し、事を用ひせしめば、國人皆怨む。石父人と爲り佞巧にして善く諛ひ利を好む。

王之用ひ、又申后を廢し、太子を去るなり。申侯怒り、繪・西夷・犬戎と與に幽王を攻む。幽王煖火を擧げ兵を徵するも、兵至ること莫し。遂に幽王を驪山の下に殺し、褒姒を虜にし、盡く周の賂を取りて去る。是に於て諸侯乃ち申侯に即きて共に⁽⁶⁾ 故の幽王の太子たる宜臼を立つ。是れを平王と爲し、以て周の祀を奉ぜしむ。

『史記』は、これまでの褒姒の物語のうち、『詩經』を起源とする(1)「哲婦」で「長舌」な女性という褒姒像を繼承しない。それは、褒姒が『呂氏春秋』より(5)「幽王が笑いを得ようとした女」と記されたことで、普段「笑わぬ女」であつたという印象が強められたことにより、(1)の特徴と組み合わせが難しくなったことによる。すでに『呂氏春秋』において、(1)は記されていない。また、『史記』は、『國語』を起源とする(4)亡國から嫁がされて復讐したという褒姒像も繼承しない。それは、『史記』が周の滅亡の主因を(6)美女に溺れ、皇后と太子を廢した幽王の行爲に求めるからである。こうした『史記』の主張は、周の太史である伯陽が擔う。伯陽は、褒姒が伯服を生み、幽王が太子と皇后を廢しようとする「史の記を讀みて曰く、「周亡びん」と述べ、褒姒を皇后、伯服を太子とする」と「禍成れり、奈何ともす可

きこと無し」と述べて、周滅亡の原因を後嗣を變更したことに求める。皇后よりも後嗣を重視することは、「幽王の太子たる宜臼」が平王に立てられることで、西周の滅亡を乗り越えて東周が建國されたと記すことに明らかである。『史記』は、『春秋公羊傳』隱公元年に記される「春秋の義」である嫡長子相續の正しさを主張するために、西周の滅亡について記す褒姒の物語に、繼承關係を加筆した。三箇所の傍線部(6)の前に記される記述がそれである。

『史記』の特徴は、周王の系譜に關する歴史的な史料を加えて、「春秋の義」を周の太史である伯陽に述べさせることで、「事」(事實)に基づく自らの主張を述べたことにある。そして、褒姒の物語のうち、(2)龍の繆から處女懐胎し、(3)卑しい素性の父なし子で、(5)「幽王が笑いを得ようとした女」として幽王の寵愛を受ける姿を伝える『國語』や『呂氏春秋』に加筆することで、物語を流麗に描き出し、周の滅亡の「歴史物語」を嫡長子の後嗣を變更すると儒教の理想の國家である周ですら、滅亡の憂き目に遇うと主張するのである。ここには、いわゆる近代歴史學の主張する客觀的な事實の記録を求めることができな

い。注(2)所掲渡邊論文が述べるように、『史記』は、『太史公書』という本来の名稱が示すように、『春秋』を書き繼ぐ思想書なのである。

『呂氏春秋』で、「幽王が笑いを得ようとした女」という要素を加えられた褒姒の物語は、『史記』により周の滅亡理由を示すなかで、「事實」として記された。それでは劉向は、『史記』の「事實」をどのよう

三、惡女傳説の完成

劉向の『列女傳』は、『國語』と『史記』の記述に字句の變更を施し、文意を分かりやすくしながら踏襲し、三カ所にオリジナルの物語を付け加える。そこに、どのような意圖が込められるのかは、後にまとめて検討することにして、六つの段落に分けて、『列女傳』に描かれた褒姒の物語を掲げていこう。

褒姒なる者は、童妾の女、周の幽王の后なり。初め夏の衰ふるや、褒人の神、化して二龍と爲り、王庭に同ひて言ひて曰く、「余褒の二君なり」と。夏后之を殺すと去るとを卜ふに、吉なること莫し。其の祭を請ひて之を藏むるを卜ふに吉なり、乃ち幣を布く。龍忽として見へず、而して祭を積中に藏め、乃ち之を郊に置く。周に至るまで、之を敢て發すること莫きなり。周の厲王の末に及び、發して之を觀るに、祭庭に流れ、除く可からざるなり。王婦人をして裸にして之に譟がしむるに、化して玄蜎と爲りて、後宮に入る。宮の童妾、未だ毀せずして之に遭ひ、既に笄して孕み、宣王の時に當たりて産む。夫無くして乳すれば、懼れて之を棄つ。第一段落は、基本的には『國語』と同じであるが、多少語句の異同がある。たとえば、「未だ毀せずして」については、『國語』は「未だ既に亂せざる」につくり、『史記』は「既に亂して」につくるが、『國語』の記述が分かり易い。『列女傳』に注をつけた梁端は、「毀」の字のあとに「齒」を補うべきであるとすが、その通りであろう。ここでは、そのまま訓讀しておく。

是より先 童謠有りて曰く、「壓弧・箕服、寔に周國を亡ぼさん」と。宣王之を聞く。後に人夫妻にして壓弧・箕服の器を賣る者

有り、王執へて之を戮せしめんとす。夫妻夜に逃るるに、童妾の棄に遭ひて夜に號くを聞き、哀みて之を取る。遂に褒に竄る。長じて美好なり。褒人の姁獄有り、之を獻じて以て贖ふ。幽王受けて之を嬖し、遂に褒姒を釋す。故に號して褒姒と曰ふ。²⁰

第二段落は、「後到人」以後の部分、すなわち褒姒が養父母から褒狗を経て、周の幽王に献上された経緯が『國語』では分かりにくい。そのため、『列女傳』は、『史記』の記述に依據しながら、褒の君主である褒狗の名を加え、褒姒が「長じて美好」であることを献上された伏線として述べるなど、それをさらに分かりやすくしている。

既に子の伯服を生む。幽王乃ち后の申侯の女を廢して、褒姒を立てて后と爲す。太子の宜咎を廢して伯服を立て太子と爲す。

^①幽王褒姒に惑ひ、出入するに之と同乗す。國事を卬へず、驅馳・弋獵すること時ならず、以て褒姒の意に適ふ。飲酒すること流湎にして、倡優前に在り、夜を以て晝に續ぐ。

第三段落は、幽王が申侯の娘を廢位して、褒姒を皇后とし、宜咎を廢位して、伯服を太子としたことまでは、『史記』と『國語』と同じである。「幽王褒姒に惑ひ」以下が、『列女傳』のオリジナルで、ここに劉向の主張が込められているので、後に検討したい。

褒姒笑はず、幽王乃ち其の笑ひを欲して萬端するも、故に笑はず。幽王烽燧・大鼓を爲り、寇至る有らば、則ち擧ぐ。諸侯悉く至るも而も寇無ければ、褒姒乃ち大いに笑ふ。幽王之を悦ばしめんと欲し、數々爲に烽火を擧ぐ。其の後信ぜず、諸侯至らず。²²

第四段落は、『史記』を踏襲して、笑わぬ褒姒を悦ばせるため、幽王がしばしば烽火を上げて諸侯の信賴を失うことを記す。

② 忠諫する者は誅せられ、唯だ褒姒の言のみ是れ従ふ。上下相諛ひ、百姓 乖き離る。申侯 乃ち繒・西夷・犬戎と與に、共に幽王を攻む。幽王 烽燧を擧げ兵を徴するも、至るも莫し。遂に幽王を驪山の下に殺し、褒姒を虜にし、盡く周の賂たからを取りて去る。是に於て諸侯 乃ち申侯に即きて共に故の太子の宜咎たがひを立つ。是れ平王爲り。③ 是れよりの後、周諸侯と異なること無し。

第五段落は、周の滅亡原因として幽王が「褒姒の言」のみに従ったことを擧げる。これも『列女傳』のオリジナナルである。それ以外の部分は、字句の異なりがあるものの『史記』の記述を踏襲している。

詩に曰く、「赫赫たる宗周、褒姒之を滅す」と。此れ之の謂なり。頌に曰く、「褒神龍に變じ、寔に褒姒を生む。興りて幽王に配せられ、后・太子を廢す。烽を擧げて兵を致し、寇の至らざるを笑ふ。申侯 周を伐ち、果たして其の祀を滅す」と。

第六段落は、すでに検討した周の滅亡原因を褒姒に求める『詩經』小雅 正月を引用し、劉歆の作とされる頌を附している。

以上のように劉向『列女傳』は、傍線を附した①～③の三カ所にオリジナナルを加えるほかは、『國語』と『史記』の記述を分かりやすくつなげ合わせながら物語を完成させている。それでは、三カ所の加筆部分には、どのような思想が現れているのであろうか。

第一の加筆で述べられる「幽王褒姒に惑」い、その結果「國事を卹」えなくなつたという敘述には、周の滅亡は幽王が褒姒という悪女に惑つたことを理由とする、という劉向の主張がある。『史記』が、皇后と太子を廢した幽王の行爲を褒姒の行いより重い罪と捉え、周の滅亡原因は、幽王の行爲にあると考えることに對して、劉向は、それを含めて褒姒という悪女に幽王が惑つたことそのものが、周の滅亡の

原因である、と主張するのである。劉向は、周という儒教の理想國家をも滅亡させる悪女傳説として褒姒の物語を完成させている。

第二の加筆で述べられる幽王がただ「褒姒の言のみ」に従つたため、臣下の上下が共に諂ひ、人びとが周から離れていったという敘述も、第一で述べた幽王が褒姒という悪女に惑つたことが周の滅亡原因であるという主張を強化するために加えられている。皇后と太子を廢し、悪女を皇后として、後嗣を變更し、政治を蔑ろにして周を滅ぼした幽王の愚行を歴史の教訓としなければならぬ、というのが劉向の主張である。そこには、劉向が仕える成帝が、趙飛燕姉妹に夢中になつていふという現實がある。それを諫めるためにこそ、劉向は『列女傳』を執筆した。

そして、第三の加筆である「是れよりの後、周諸侯と異なること無し」という周の行く末は、漢の未來への警告である。趙飛燕姉妹に惑わされている成帝への諫言という劉向の執筆目的がここに現れている。

おわりに

歴史事實がそのまま歴史書に記載されることは少ない。歴史物語は言うまでもない。ただ、『史記』と『列女傳』の差異は大きくなく、笑わぬ女の記述が『春秋左氏傳』を起源とするように、歴史書や經書、そして子書に記される歴史物語には、歴史事實との區別をつけることが難しい敘述も多い。それでは、歴史の眞の姿に迫ることは難しいのだろうか。

歴史物語が變容していく背景を考える上で、文獻での記述を辿ることとは有用であろう。たとえば劉向の『列女傳』における成帝への思い

がそこから浮き上がるように、文献から眞の歴史に近づくことも可能なのではないだろうか。

『詩經』で周の滅亡原因としてその名を挙げられていた褒姒は、「哲婦」で「長舌」な女性と描かれていた。『國語』は、『詩經』の後に創作・傳承された褒姒についての物語を龍の祭から處女懷胎した、卑しい素性の父なし子が、亡國から嫁がされて復讐する、という三種の物語の結合體として表現した。『春秋左氏傳』に記されていた笑われない妻と美女が國を滅ぼす、という要素は、『呂氏春秋』により褒姒の物語に結合される。『史記』はこうした褒姒の物語の中から、『詩經』を起源とする「哲婦」で「長舌」な女性像、『國語』を起源とする亡國から嫁がされて復讐したという褒姒像を繼承しない。それは、『史記』が周の滅亡の主因を美女に溺れ、皇后と太子を廢した幽王の行爲に求めたためである。『史記』は、『春秋公羊傳』隱公元年に記される「春秋の義」である嫡長子相續の正しさを主張するために、西周の滅亡について記す褒姒の物語に、王位の繼承關係を加筆したのである。

劉向の『列女傳』は、『國語』と『史記』を物語の基本としながら、そこに三つの要素を加えることで悪女傳説を完成させた。普段笑われない褒姒は、諸侯の姿を見て笑うことで幽王を夢中にさせ、周は幽王が褒姒という悪女に惑ったことで滅亡した。悪女を皇后とし、政治を蔑ろにして周を滅ぼした幽王を歴史の教訓に、趙飛燕姉妹に夢中になっている成帝に諫言するという劉向の執筆目的がここに現れているのである。

周の滅亡は、周を支えていた諸國家との婚姻・後嗣關係をめぐる内紛であり、それに褒姒と呼ばれる女性が関わっていたこと、それが殘された文献資料から現在明らかにできる歴史事實である。二十四史の

筆頭の史書とされる『史記』の褒姒に關する記述、とりわけ最も有名な「笑わぬ女」としての褒姒の姿は、後世に構築された物語である。このように史書に記載される物語的な要素の起源を探り、それらを削除していくことにより、一歩ずつではあるが、史實を明らかにすることも可能なのではないだろうか。

注

- (1) 劉向『列女傳』卷七孽嬖傳における女性像については、下見隆雄『劉向『列女傳』の研究』序論篇第二章（東海大學出版會、一九八九年）、山崎純一『列女傳』上、序章第二節（明治書院、一九九六年）を参照。
- (2) 渡邊義浩『史記』における『春秋』の繼承（『RILASTOURNAL』五、二〇一七年、『古典中國』における史學と儒教）汲古書院、二〇二二年に所收）は、『史記』は、歴史書ではなく、『春秋』を繼承する思想書である、と主張している。
- (3) 『詩經』と西周時代の歴史との關係については、赤塚忠『詩經研究』赤塚忠著作集第五卷（研文社、一九八六年）を参照。
- (4) 『詩經』小雅正月に記された褒姒像については、馬銀琴「褒姒滅周」故事與《詩經・小雅・正月》的性質（『北京大學學報』哲學社會科學版、二〇一八—一六、二〇一八年）を参照。
- (5) 『詩經』大雅瞻卬に記された褒姒像については、王曉輝「談《詩經・瞻卬》的諷刺詩特點」（『黑龍江農墾師專學報』二〇〇二—二二、二〇〇二年）、郭江虹「20世紀《詩經・瞻卬》研究綜述」（『漢字文化』二〇一八—一〇、二〇一八年）などを参照。
- (6) 褒姒に關する傳説の全體像については、田孟禮「古褒國與褒姒—兼說褒姒與秦國的誕生」（文物出版社、二〇一九年）を参照。

(7) ①宣王之時、有童謠曰、檠弧・箕服、實亡周國。于是宣王聞之、有夫婦鬻是器者。王使執而戮之。②府之小妾生女而非王子也。懼而棄之。此人也、收以奔喪。天之命此久矣、其又何可爲乎(『國語』鄭語)。なお、『國語』は『國語集解』(中華書局、二〇〇二年)に依據した。『國語集解』によれば、意味の通じにくい「天之命此久矣」の前に、宋庠本は、「喪人有獄、而以爲入」の八字があるとするが、それによって意味が分かりやすくなる譯ではないため、『國語集解』は採用していない。

(8) 『童謠』が、わらべ歌の形を取った知識人による輿論形成であることは、申田久治『中国古代の「謠」と「豫言」』(創文社、一九九九年)を参照。

(9) 訓語有之曰、①夏之衰也、喪人之神、化爲二龍、以同于王庭而言曰、余喪之二君也。夏后卜殺之與去之與止之、莫吉。卜請其繇而藏之、吉。乃布幣焉。而策告之。龍亡而縻在。櫝而藏之、傳郊之。及殷・周、莫之發也。及厲王之末、發而觀之、滌流于庭、不可除也。王使婦人不幃而諫之、化爲玄龜、以入于王府。②府之童妾、未既亂而遭之、既笄而孕、當宣王時而生。不夫而育、故懼而棄之。爲弧服者、方戮在路。夫婦哀其夜號也、而取之以逸、逃于喪(『國語』鄭語)。

(10) 谷口義介『喪奴説話の形成』(『熊本短大論集』三七―三、一九八七年、『中国古代社會史研究』朋友書店、一九八八年に所収)。また、出土資料の「繫年」も含めて、喪奴に關する傳説を整理したものに、徐銘燦『喪奴滅周新論』(『佳木斯大學社會科學學報』三四―四、二〇一六年)、梁中效『詩經』中的喪國喪奴述論』(『安康學院學報』三三―六、二〇二一年)を参照。さらに、喪奴の傳説を明清まで追ったものに、梁中效『喪奴形象淺析』(『安康學院學報』二八―一、二〇一六年)、楊允・許志剛『赫赫宗周、喪奴滅之』―『女色禍國』論及其文學表現探析』(『社會科學學刊』一七六、二〇〇八年)がある。なお、喪奴の傳説については、李幼麟『幽王・喪奴傳説について』(『駒澤國文』二九、一九九二年)、

王夢迎『論喪奴』(『文學教育』二〇一八―一四、二〇一八年)もある。(11) 喪人喪奴有獄、而以爲入於王、王遂置之。而嬖是女也、使至於爲后。而生伯服。天之生此久矣、其爲毒也大矣。將使候淫德而加之焉。毒之酋腊者、其殺也滋速(『國語』鄭語)。

(12) 昔夏桀伐有施、有施人以①妹喜女焉。妹喜有寵、于是乎與伊尹比而亡夏。殷辛伐有蘇、有蘇氏以②妲己女焉。妲己有寵、于是乎與膠鬲比而亡殷。③周幽王伐有褒、褒人以喪奴女焉。喪奴有寵、生伯服。于是乎與虢石甫比、逐太子宜臼而立伯服。太子出奔申。申人・鄩人召西戎以伐周。周于是乎亡。今晉寡德而安俘女、又增其寵。雖當三季之王、不亦可乎(『國語』晉語一)。

(13) 昔賈大夫惡。娶妻而美。三年不言不笑。御以如臯、射雉獲之。其妻始笑而言。賈大夫曰、才之不可以已。我不能射、女遂不言不笑夫(『春秋左氏傳』昭公傳二十八年)。

(14) 昔有仍氏生女、黥黑而甚美。光可以鑑、名曰玄妻。樂正后夔取之、生伯封。實有豕心、貪惓無厭、忿類無期、謂之封豕。有窮后羿滅之、夔是以不祀。且三代之亡、共子之廢、皆是物也。女何以爲哉。夫有尤物足以移人。苟非德義、則必有禍(『春秋左氏傳』昭公傳二十八年)。

(15) ⑤周宅鄂・鎬近戎人。與諸侯約、爲高保禱於王路、置鼓其上、遠近相聞。即戎寇至、傳鼓相告、諸侯之兵皆至救天子。戎寇當至、幽王擊鼓、諸侯之兵皆至。喪奴大説(喜)(笑)之。幽王欲喪奴之笑也、因數擊鼓、諸侯之兵數至而無寇。至於後戎寇眞至、幽王擊鼓、諸侯兵不至。④幽王之身、乃死於麗山之下、爲天下笑。此夫①以無寇失眞寇者也。賢者有(小善)以致大善、不肖者有(小惡)以致大惡。②喪奴之敗、乃令幽王好小說以致大滅。故形骸相離、三公九卿出走。此③喪奴之所用死、而平王所以東徙也。秦襄・晉文之所以勞王(勞)而賜地也(『呂氏春秋』卷二十一慎行論疑似)。なお、『呂氏春秋』は、(清)畢沅『呂氏春秋』校正本を底

本とし、陳奇猷（校注）『呂氏春秋新校釋』（上海古籍出版社、二〇〇二年）に依據し、文字を改める場合には（一）で、元の文字は（二）で改めた文字を表記した。

- (16) 三年、幽王嬖愛褒姒。褒姒生子伯服、幽王欲廢太子。太子母申侯女而爲后。後幽王得褒姒愛之、欲廢申后、并去太子宜臼、以褒姒爲后、以伯服爲太子。⁽⁶⁾周太史伯陽讀史記曰、周亡矣。⁽²⁾昔自夏后氏之衰也、有二神龍止於夏帝庭而言曰、余褒之二君。夏帝卜殺之與去之與止之、莫吉。卜請其糝而藏之、乃吉。於是布幣而策告之。龍亡而糝在。櫝而去之。夏亡、傳此器股。殷亡、又傳此器周。比三代、莫敢發之。至厲王之末、發而觀之、糝流于庭、不可除。厲王使婦人裸而譟之。糝化爲玄龜、以入王後宮。後宮之童妾、既甗而遭之、既笄而孕、無夫而生子、懼而弃之。⁽³⁾宣王之時、童女謠曰、栗弧・箕服、實亡周國。於是宣王聞之、有夫婦賣是器者、宣王使執而戮之。逃。於道而見鄉者後宮童妾所弃妖子出於路者、聞其夜啼、哀而收之。夫婦遂亡、奔於褒。褒人有罪、請入童妾所弃女子者於王以贖罪。弃女子出於褒、是爲褒姒。當幽王三年、王之後宮、見而愛之。生子伯服、竟廢申后及太子、以褒姒爲后、伯服爲太子。⁽⁴⁾太史伯陽曰、禍成矣、無可奈何。⁽⁵⁾褒姒不好笑、幽王欲其笑萬方、故不笑。幽王爲褒姒・大鼓、有寇至則舉燹火。諸侯悉至、至而無寇、褒姒乃大笑。幽王說之、爲數舉燹火。其後不信、諸侯益亦不至。幽王以虢石父爲卿、用事、國人皆怨。石父爲人佞巧善諛好利。王用之、又廢申后、去太子也。申侯怒、與繒・西夷・犬戎攻幽王。幽王舉燹火徵兵、兵莫至。遂殺幽王驪山下、虜褒姒、盡取周賂而去。於是諸侯乃即申侯而共立⁽⁶⁾故幽王太子宜臼。是爲平王、以奉周祀（『史記』卷四 周本紀）。なお、『史記』に描かれた褒姒像については、郭鵬『史記』中褒姒史學質疑」（『陝西理工學院學報』社會科學版、二五—四、二〇〇七年）がある。

(17) 「春秋三傳」における後嗣については、渡邊義浩「兩漢における春秋

三傳と國政」『兩漢における詩と三傳』汲古書院、二〇〇七年、『後漢における「儒教國家」の成立』汲古書院、二〇〇九年に所収を参照。

- (18) 褒姒者、童妾之女、周幽王之后也。初夏之衰也、褒人之神、化爲二龍、同於王庭而言曰、余褒之二君也。夏后卜殺之與去、莫吉。卜請其糝藏之而吉、乃布幣焉。龍忽不見、而藏糝櫝中、乃置之郊。至周、莫之敢發也。及周厲王之末、發而觀之、糝流於庭、不可除也。王使婦人裸而譟之、化爲玄蜃、入後宮。宮之童妾、未毀而遭之、既笄而孕、當宣王之時產。無夫而乳、懼而棄之（『列女傳』卷七 孽嬖傳 周幽褒姒）。なお、『列女傳』は、鄭曉霞・林佳鬱（編）『列女傳彙編』（北京圖書出版社、二〇〇七年）に収録される梁端（校注）『列女傳校注』に依據した。
- (19) 『列女傳』の校注本については、仙石知子『列女傳』研究序説—中國近世における流布と受容」（『東洋の思想と宗教』三五、二〇一八年）を参照。
- (20) 先是有童謠曰、栗弧・箕服、寔亡周國。宣王聞之。後有人夫妻賣栗弧・箕服之器者、王使執而戮之。夫妻夜逃、聞童妾遭棄而夜號、哀而取之。遂竄於褒。長而美好。褒人媼有獄、獻之以贖。幽王受而嬖之、遂釋媼。故號曰褒姒（『列女傳』卷七 孽嬖傳 周幽褒姒）。
- (21) 既生子伯服。幽王乃廢后申侯之女、而立褒姒爲后。廢太子宜咎而立伯服爲太子。⁽¹⁾幽王惑於褒姒、出入與之同乘。不卹國事、驅馳・弋獵不時、以適褒姒之意。飲酒流湏、倡優在前、以夜續晝（『列女傳』卷七 孽嬖傳 周幽褒姒）。
- (22) 褒姒不笑、幽王乃欲其笑萬端、故不笑。幽王爲烽燧・大鼓、有寇至、則舉。諸侯悉至而無寇、褒姒乃大笑。幽王欲悅之、數爲舉燹火。其後不信、諸侯不至（『列女傳』卷七 孽嬖傳 周幽褒姒）。
- (23) 忠諫者誅、唯褒姒言是從。上下相諛、百姓乖離。申侯乃與繒・西夷・犬戎、共攻幽王。幽王舉燹燧徵兵、莫至。遂殺幽王於驪山之下、虜褒姒、

盡取周賂而去。於是諸侯乃即申侯而共立故太子宜咎。是爲平王。^③自是之後、周與諸侯無異（『列女傳』卷七孽嬖傳周幽褒姒）。

(24) 詩曰、赫赫宗周、褒姒滅之。此之謂也。頌曰、褒神龍變、寔生褒姒。興配幽王、廢后・太子。舉烽致兵、笑寇不至。申侯伐周、果滅其祀（『列女傳』卷七孽嬖傳周幽褒姒）。

(25) 山崎純一『列女傳』下（明治書院、一九九七年）は、第一の加筆について、劉向獨自の創案ではなく、當時の人びとが抱く共通の心象によつた、として谷永の上奏を引用するが、根據はないので従わない。第二の加筆の解釋についても同様である。

(26) 成帝と趙飛燕姉妹については、仙石知子「劉向『列女傳』と趙飛燕姉妹批判」（『日本儒教學會報』六、二〇二二年）を参照。